

「みんな違ってみんないい」のか？～相対主義と普遍主義の問題

山口裕之 ちくまプリマー新書 2022

はじめに

①

- 相対主義 「人や文化によって価値観が異なり、それぞれの価値観には優劣がつけられない」という考え方
- 普遍主義 「客観的で正しい答えがある」という考え方

世の中には、両立しない意見の中から、どうにかして一つに決めなければならぬ場合がある



現実の世界では権力を持つ人の考えが通ってしまう

「正しさ人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」いった主張は、多様性を尊重するどころか、異なる見解を、権力者の主観によって力任せに切り捨てることを正当化することにつながってしまう

②

「科学的に判断するべきだ」→「科学は一枚岩ではない」
科学者の中にも、さまざまな立場や説を取っている人がいる

科学とは、多数の科学者が論争する中で、「より正しそうな答え」を決めていくこと

③

「正しさ」とは何か それほどのようにして作られていくものか
そうした考察を踏まえて、多様に他者と理解し合うためにはどうすればよいのか

結論

「正しさは人それぞれ」でも「真実の一つ」でもなく、人間の生物学的特性を前提としながら、人間と世界の関係や人間同士の間の中での、いわば共同作業によって「正しさ」というものが作られていく

「どんなことでも感じ方しだい」「心を傷つけてはいけない」といった感

情尊重の風→しかし、学び成長するとは、ときに心の傷つく作業である

第1章 相対主義的主張はどのようにして生まれ、どのように広まったか

①・西洋文明 普遍性を偏重する特殊な文明

さまざまな事柄について普遍性を探求し、また自分たちが作り出したものこそが普遍的だと考えるのが、西洋文明の特徴

例 基本的人権の普遍性

17世紀から18世紀のヨーロッパという特殊な場所・時代の中で考え出されたもの→当初の根拠「神がそれを与えたから」

②・相対主義的な考え方の始まり

20世紀初頭 植民地をめぐる争い→西洋文明的価値観の普遍性への疑い

○実存哲学 正しさは人それぞれ

ハイデガー 「一人ひとりの人間の具体的なあり方」
「現存在の本質はその実存にある」
サルトル 「実存は本質に先立つ」
「人間は自由であることが宿命づけられており、自分が何者かは自分で作っていくものだ」

○構造主義 正しさは文化それぞれ

歴史や文化が人間の行動や考え方を形づくっていく→文化相対主義

レヴィ=ストロース

ミシェル・フーコー

時代によって「知」の構造が異なる」

・何をどんな手段で探求するのが科学的なのかという点についての考え方が時代によって異なっている

トマス・クーン

科学は古い理論体系が新しい理論体系に取って代わられる

③文化相対主義の広がり→多様性を求める運動へ
公民権運動、フェミニズム運動、同性愛者の権利運動、ベトナム反戦運動



「集団単位の多様性」→「個人単位の多様性」へ

④フランスの現代思想

独善的な西洋文明が生み出した社会の体制をよりよいものへと改善しようとする

すべての制度は言葉で紡がれる
言葉の意味は「一般的なもの」である
ゆえに、言葉は個別性のすべてをすくいとることはできない
に名前やカテゴリーを押し付けるこさこそが権力である

既存の言葉や秩序を単に拒否するのではなく、既存の言葉の意味をずらす、既存の論理を組みかえるといった手段で、言葉を自分たちの手に取り戻し、取りこぼされ続ける者たちを拾い続けつつ、どうしたら多様な個別的人々が抑圧されないようにしながら多数の人たちが連帯できるのかという課題を何とか解決しようとした

⑤「多様性を求める声」は、199年代「新自由主義」に取り込まれる

- ・ミルトン・フリードマンの「経済理論」
- ・ロバート・ノージックの「リバータリアニズム」

「個人の自由を尊重し、国家による介入をなるべく少なくしようという主張」

多様性を求める 1960 年代の学生や市民の声は権力にとってまことに都合のよい「正しさは人それぞれ」という形に骨抜きされて広まった

「どうしたら多様な個々人が抑圧されないようにしながら多数の人たちが連帯できるのか」という課題に取り組むためには、「集団単位の多様性」

と「人それぞれの多様性」との間の鋭い対立を自覚すべき

第2章 「人それぞれ」というほど人は違ってはいない

「言語学」と「文化人類学」

①言語相対主義とその批判

・フェルディナン・ド・ソシュール

意味の恣意性



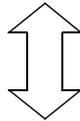
・ベンジャミン・ウォーフ

サピア・ウォーフの仮説

「言語がなければ世界はカオス状態である」

「言語が違えば世界が違って見える」

→極端な言語相対主義



ブレント・バーリン、ポール・ケイ

・基本の色彩語についての研究、検証

色の区別には物理的な必然性はなく、その意味ではたしかに「恣意的」だが、人間の身体構造による必然性（いわば「生物学的な必然性」）はある

②チョムスキーの言語生得説

- ・経験だけでは言語を学ぶことができない
- ・前提となる知識が人間には生まれつき備わっている
- ・人間は、言語を獲得して他者との相互理解の世界に入る前に、まずは自分一人の世界を作り上げる

③言語の「多様性」「恣意性」「必然性」

・人間の認識は言語によって「何でもあり」に変化するものではなく、人類共通の身体構造や欲求による制限を受けている

- ・言語には物理学的な必然性はないが、生物学的必然性はある
- ・言葉の意味の多様性は人間にとって理解可能な範囲にとどまる

④文化人類学における相対主義

- ・文化人類学 西洋諸国が植民地として支配した地域の調査から始まる
「未開文明の珍しい習俗」



ダーウィンの「進化論」
→優生学へ 「人種や民族の優劣は遺伝的に決まっている」
遺伝的決定論



フランツ・ボアズ

遺伝的決定論に対して、文化の多様性を示すことで反撃
それぞれの文化には独自の価値があるという文化相対主義の先駆け

マーガレット・ミード

『サモアの思春期』 思春期に普遍性があるのか
サモアの少女たちは、「大きな動揺」を経験しない
サモアの文化 「家族制度」に起因する

- ・性に対する規範が希薄
 - ・特定のパートナーに強く執着しない
 - ・精神的に不安定になることはない

⑤文化相対主義への批判



デレク・フリーマンによるミード批判

『マーガレット・ミードとサモア』

サモアの社会 敬意主義的 性に関する厳格な規範

- ・サモアの少女たちも思春期には精神的な不安定に陥る

人間の行動は、単に遺伝子が決定するものでも、文化が決定するものでもなく、その相互作用によって形作られる

思春期に精神的な不安定に陥るのは、一面では人間という生物種の成長

段階に組み込まれているが、それが実際どのような形で表出するかという点には文化的な違いがある

- ⑥ドナルド・ブラウン 『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』
フリーマンの研究を高く評価

文化的な多様性を示すと思われていたが、実はそうではなかった6つの事例

- ①基本の色彩語 ②サモアの思春期 ③チャンブリ族の男女の役割
④表情について ⑤ホピ族の時間観念 ⑥エディプスコンプレックス

・ 普遍的人間の特徴

- ① 言語を持つ ② 物語や詩を作る ③ 火を使う
④ 集団生活を営む
⑤ インセストが禁止される
⑥ おとなの男性が政治的に優位な立場を占める
⑦ 集団全体に関わる「公的なものごと」があり、それについて決定するための手続きがある
⑧ 暴力やレイプや殺人は禁じられる
⑨ 礼儀作法やもてなしがある
⑩ 甘いものを好む
⑪ 宗教や呪術がある

⑦まとめ

- 人間が生物として生きていくうえで必要なことは基本的に同じであり、社会はまずそれらを満たすために構成される
- 「正しさは文化により異なる」と唱えることは、具体的にどこがどうして違うのかを理解する努力を放棄することにつながりがち
- 「人それぞれ」「みんなちがってみんないい」というほどには、人は違ってない
- 言語や文化の多様性は人間にとって理解可能な範囲にとどまる